

ピアノ アドバイザー



落合 佐紀

栃木県益子町出身。4歳よりピアノを始める。栃木県立宇都宮女子高等学校を経て、東京音楽大学ピアノ科卒業。在学中、公益財団法人飯塚毅育英会より奨学金を得る。

2005年アジア国際ピアノコンクール奨励賞受賞。2006年、第10回PIARAピアノコンクール全国大会シニアC部門最優秀賞受賞。

2007年より、同育英会海外留学支援奨学生として渡独。2010年、ドイツ・ミュンスター国立音楽大学大学院ピアノ科・ディプロム課程修了後、引き続きミハエル・ケラー氏のもと研鑽を積む。2020年、同大学院ピアノ科・修士音楽芸術課程を最優秀にて修了。2014年より、マンハイム国立音楽舞台芸術大学大学院にて、パウル・ダン氏に師事。2017年、ピアノ室内楽科を最優秀の成績で修了。

2009年、WDR 西ドイツ放送音楽祭にて室内オーケストラと共演、2012年には、選抜オーディションに合格し、同放送内での生収録コンサートに出演。2014年、ミュンスター音楽大学学内室内楽コンクールに2つのアンサンブルで参加、第2位及び第3位。また、2012年にユーディ・メニューイン財団「Live Music Now」のオーディションに合格後、専属ピアニストとしてミュンスター近郊でコンサート活動を行う。2019年3月、ミュンスター市立劇場主催のコンサートシリーズにソリスト・声楽伴奏者として出演、エアブドローステンホフ城にて1828年製のウィーンのフォルテピアノ、ジョセフ・ブロードマンを演奏し、好評を博す。

これまでに、ピアノを岩崎綾子、上野則子、仲山笑子、海老原直美、徳田容子、パーヴェル・ネルセシアン、ミハエル・ロイシュナーの各氏に師事。ウィーンにてローランドバティック、ヴォルフガング・ヴァッチンガー各氏、ツヴィンゲンベルグにてキャサリン・ヴィッカーズ氏のマスタークラスを受講。また、フォルテピアノをウルリッヒ・ベーツ氏に師事、トビアス・コッホ氏のマスタークラスを受講。

ソロ、室内楽、フォルテピアノの各分野で、ドイツ各地にてコンサート活動を行う傍ら、2011年よりミュンスター国立音楽大学・同大学院講師を務める。2019年、日本へ帰国、2020年4月より宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科にて講師として後進の指導にあたる。

～作曲家の時代のピアノからひも解く～

1. はじめに

今皆さんが演奏している曲を作った当時の作曲家は、大ホールに大きなグランドピアノがある時代が来ることも、作った曲が何百年後もずっと演奏され続けることも、もちろん知らなかったでしょう。



ヨーゼフ・フォン・シュパウン宅でのシューベルトの演奏会、モーリッツ・フォン・シュヴィンドによるセピアスケッチ、1868年（出典：ヤスパート・ヴェルナー：シューベルト、フランクフルト社会出版、フランクフルト・アム・マイン、1941年P.496）

演奏会も、昔は宮廷やサロン、普通のお部屋で行われていました。このスケッチは、シューベルトが友人・知人を招いて演奏をしている様子です。今の大ホールとはまた違った親密さと臨場感が想像できますね。

時を経ても色あせることのない数々の名曲を、現在の私達が、大ホールで大きなモダンピアノを使って演奏するにはどのようなことを意識したらよいでしょうか。

2. 作曲家が使っていたピアノ

各時代の鍵盤楽器は、一台の楽器毎に、音色もタッチも構造も材質もそれぞれ全く異なるものでした。金属よりも木を多く使い華奢であり、また低・中・高音域によって全く音色が違うものも多かったのです。一音一音が繊細で、ペダルを少し長めに踏んでも、音の粒はクリアなままでした。

今のピアノはどの音域も当時と比べると揃っており、豊かな持続する響きが出ます。音響の良い大ホールでは、特に音域のバランスや音の出し方、身体の使い方、ペダルの踏み方等をこだわって工夫し、演奏者自身で音色を自在に変える必要があります。

ドイツ・ミュンスター国立音楽大学内、ペーツ・コレクション所蔵、オリジナルのフォル



製作者未詳、1785年頃、オーストリア



ブリュートナー、1860年頃、ライプツィヒ



シュライプ、1823年頃、ベルリン

3. 大ホール演奏へ向けての8つのポイント

① 空間・空気を感じて

ピアノの前に座ったら自分とピアノとの間の空間を取るよう意識しましょう。同時に、ピアノとステージを包んでいる空気を感じてください。

② 身体と腕をリラックス

ステージに自分の身体を溶け込ませ、身体も腕もリラックスした状態で演奏を始めましょう。



③ 呼吸して

演奏中に知らず知らずのうちに呼吸が止まっていますか？ 身体が硬くならず、自由に表現できるよう、口と鼻を柔らかく保って自然と空気が入るよう心がけてみてください。

④ 重心を意識して

緊張すると、声と同じように音もうわつきがちになります。お腹の重心を意識して身体を安定させましょう。



⑤ 指先の集中と音色へのこだわり

弾いている空間が大きければ大きいほど、音の芯を掴むことが大切です。指先に神経を集中させ、音をコントロールします。出したい音色かどうか、耳で確認！

⑥ 響きと音のつながり

演奏が始まったら、大ホールの隅々まで音を飛ばすようなイメージをいつも持ちましょう。音と音の間を密に感じ、つながりを意識することも大ホールでは必須です！

⑦ 休符も音楽

休符で音が消えるとき、その一瞬を大切にしてください。休符を聴きながら流れは止めず、気持ちは次の音に向かいましょう。

⑧ 耳でペダルを踏む

演奏が始まり音が鳴ったら、その響きを聴きながら、ペダルの長さや深さを調節しましょう。ホールは天井が高く、響く空間ですので、気をつけないと音のクリアさが無くなったり、音が混じりすぎてしまったりします。逆に音の伸び、音の調和を感じながら踏むと、素晴らしい効果が現れます！

～まとめ～

もし各時代の作曲家が皆、ピアノの発展の集大成である現在のピアノを使って作曲していたら、と考えてみてください。きっと全く違った曲が生み出されていたでしょう。逆に言えば、各時代のピアノを使って作曲された様々なスタイルの名曲はこの世に出てこなかったかもしれません。

皆さんは、その残された名曲に触れ、今のモダンピアノを使って、現代の聴き手にそれを伝えるという貴重な使命があります。

当時の響きを想像しながら、大きなホールで素晴らしいピアノを使って思い切り音を楽しみ、そして丁寧に耳を傾けながら沢山の音色を表現してみてください。



ドイツ・ミュンスター国立音楽大学内、ベーツ・コレクション所蔵、1830 年頃製、ウィーンのフォルテピアノ、フリッツでのコンサート終演後に